

杭州事件から「水滸伝」批判へ

—中国内政の最近の方向—

中 嶋 嶺 雄
(東京外国語大学助教授)



はじめに

今日、私に与えられたテーマは「中国内政の最近の方向」ですが、そういうことになる、どうしても七五年一月の全国人民代表大会以降、最近に至るまでの情勢をフォローする必要があるかと思う。その辺の問題を検討したのちに、最後には、ジャーナリスティックなトピックスでもある「水滸伝」批判の問題、すなわち現代の宋江はだれかというような興味深い問題にも若干触れてみたいと思う。

不透明な政治状況

そこで、過般の第四期全国人民代表大会はいったいどう

いう意味をもっていたのか、というところからまず入っていきたくと思う。この問題については、私自身もすでにいくつかの意見を発表して参りましたが、やはり、一九七三年夏の十全大会以来の、いわゆる「批林批孔」運動が勃発し、やがてその中に含まれていた潮流と反潮流運動とが、一種の妥協をみた経緯をふりかえる必要があるかと思う。私の意見ではノミナルには、いわば毛沢東を中心とする急進的なグループの主張がかなり取り入れられたものの、実質的な人事面では、いわば実務派の優位が目立ったことは否定できなかったように思う。

そういう全国人民代表大会をめぐる雰囲気を実感として、私自身、当時中国を訪れる機会があって見て参りました。

た。私自身にとって中国は八年間の空白があって、前回訪れた文化大革命の激動期と比べざるを得ないが故に、その比較があまりにも鮮やかで、一口に言えば中国は雰囲気的には大変落ち着いていた。それから、当時に比べたら市場やデパートの品物が非常に豊富になっている。にもかかわらず、他方では主要な博物館などは全部閉鎖されたままだし、北京の観光地としても有名な北海公園や景山公園というような中心部が、完全に立入り禁止になっていて、そういう二律背反的な状況のなかに北京はある種の落着きをと

動関係のパンフレット、小冊子類を百冊近く新華書店で買ってききましたが、いずれもある意味ではきわめて専門的というか瑣末な論議になっていて、これでは、とても中国の大衆がついてこれないのではないかという感じをもったわけです。

りもどしているという複雑さを示していたわけです。すでにご承知かと思うが、私はたまたまモンゴルのウランバートルから内蒙古自治区を経て汽車で北京に入っただけに、中国の変化を非常に強く実感した。しかしながら、同時に、一般の予想に反して、「批林批孔」運動が、全く大衆運動としての性格をもっていないことを知った驚きにもとらわれた。

というのは、批林批孔運動にかんして、日本で『人民日報』や『紅旗』だけを見てみると、大変なキャンペーンであるというふうに感じられるわけだが、一週間ぐらいの北

京の滞在でしたが、実際に私が目を皿のようにしてこの問題を見た限りでは、特に文化大革命の大衆運動と比較してしまつたためか、全くそれが大衆運動的な性格をもっていない。今日はここに持つてきませんが「批林批孔」運

考えてみると、「批林」といい、「批孔」といいこれは、いわば過去の人物との闘争です。大衆のなかには孔子を今さら批判してもというふうな気持もあるうし、林彪はすでに悪者としてこの世から葬られてしまった、あるいは墜落死してしまった人物であって、いわばシャドー・ボクシングをやっているみたいなのです。「批林批孔」運動のなかに、特定の人物たとえば周恩来批判が含意されていたことは疑いないにせよ、文化大革命のときのように、実権派がそこに存在して徐々に正体が暴露されてゆき、その黒幕はだれかという形で食うか食われるかの闘争が行われるといった状況とは、ずいぶん違うような気がします。ここに批林批孔運動が盛り上がりがない一つの大きな要因があったような気がする。

しかも、この「批林批孔」運動は、当初は十全大会以来の反潮流の動きを反映し、いわば大きな流れに逆らうことが革命だという大原則があったような気がしますが、「批林批孔」運動にいくつかの問題が含まれたがら、この運動には徐々にワクがはめられてきた。七四年一月元旦の共

同社説「新年の献辞」の中で「批孔」は、批林の一構成要素にしなければいけないというワクがはめられた。すなわち、「批林」にかこつけて他のだれかを批判することにたってはいけないというワクがはめられた。

やがて昨年(七四年)の十月、よく指摘されているように毛沢東の指示があった。これは、中共中央発第二十六号文献と言われる内部通達ですが、この中で毛沢東は、いわば全党全軍の団結を呼びかけたわけです。この呼びかけは、「安定団結」という後のスローガンにつながっていくわけだが、文革以来もう八年もやったけれども、なかなかうまくいかない、今は全党全軍が団結することが大事なんだというニュアンスがそこから読み取れるわけです。

こうした状況の中で、つまり非常に妥協的な輪郭のはっきりしない状況の中で全人代が開かれたのではないか。私が、「批林批孔」運動の盛り上がり過ぎのなせ、あるいは中国で感じた落着きというものは、こういうボケた状況の反映だったのかも知れないと思われるわけです。すなわち、全国人民代表大会というものは、その主要な方向がどこにあったのか、なかなか断定しにくいような不透明な輪郭、つまり、どういうふうにも見られるような状況をそこに残していたような気がします。

こうして状況の中で、つまり非常に妥協的な輪郭のはっきりしない状況の中で全人代が開かれたのではないか。私が、「批林批孔」運動の盛り上がり過ぎのなせ、あるいは中国で感じた落着きというものは、こういうボケた状況の反映だったのかも知れないと思われるわけです。すなわち、全国人民代表大会というものは、その主要な方向がどこにあったのか、なかなか断定しにくいような不透明な輪郭、つまり、どういうふうにも見られるような状況をそこに残していたような気がします。

こうして状況の中で、つまり非常に妥協的な輪郭のはっきりしない状況の中で全人代が開かれたのではないか。私が、「批林批孔」運動の盛り上がり過ぎのなせ、あるいは中国で感じた落着きというものは、こういうボケた状況の反映だったのかも知れないと思われるわけです。すなわち、全国人民代表大会というものは、その主要な方向がどこにあったのか、なかなか断定しにくいような不透明な輪郭、つまり、どういうふうにも見られるような状況をそこに残していたような気がします。

この姚文元論文に対して比較されたのが、その後に出てきた張春橋論文です。一カ月後に同じ『人民日報』が掲載したわけですが、姚文元が久々に大論文を書き、張春橋がそれに続いて「ブルジョア階級に対する全面的独裁について」という論文を書いたというところで、大いに注目を浴びたことは皆さんもご承知の通りです。その内容からして、

「安定団結」の曲折

そういう状況の不明確さのなかで事態がどう展開するかと思っていた矢先に出てきたのが、例のプロレタリア独裁理論の学習運動です。

この学習運動については、もうすでにいろいろな人が指摘していますので、簡単にしか触れませんが、全人代以降、毛沢東の指示によるというわけですが、一月下旬、二月上旬から急速に盛り上がりつつあるわけですが、しかしながら、考えてみると、中国はいくつかのキャンペーンがかなり重層的に行われてきている。昨年も「批林批孔」運動が盛り上がりつつあったんですが、決して「批林批孔」運動だけではなくて、「紅樓夢」批判の運動も再び昨年あたりからずっと続いています。いま私の手許にも、つい最近出た「紅樓夢」批判の評論集がありますし、それから、例の「三上桃峰」(三たび桃峰に登る)という修正主義の劇を批判する運動なども、こうやって見てみるとずっと続いてきたわけです。ただ、こういうものにどうも一貫性がないうような気がします。それぞれの関連がなかなかはっきりしない。そういう中で、プロレタリア独裁理論の学習運動は、ある意味では一際目立った輪郭を描いていたような気がします。

というのは、このキャンペーンが二月一日発行の『紅

かつては文革ラジカルと言われた人たちの間に、ある種の分岐が起こったのではないかという見方もありました。確かに張春橋論文の方は、姚文元論文に比べてはるかに着実な内容をもっているという気がしますし、しかも、同じように「ブルジョア風」を批判しながらも、「ブルジョア風」と「共産風」の区別をしっかりとつけていない人がいる。その辺をきちんと思想的に処理しておかないと、徹底したプロ独裁へは進めないんだということを言って、「一部の同志よ、やはり大きな隊列に従って引き続き前進しようではないか」というふうに、かなり包容力をもった団結のトーンに貫かれていくような気がします。

その比較はともかくとして、張春橋が文革当時とは違い、姚文元よりも人事面でははるかに重要なポストをすでに占めてきている。党中央政治局常務委員であるばかりか、全国人民代表大会で国務院副総理になり、大会の秘書長も勤めたと思います。去る十月九日には軍の総政治部主任になっていることも明らかになった。こういうふうに、ある意味で、かつて鄧小平が八全大会で占めたような、あるいはその後のプロセスの中で占めた地位に匹敵するような実務的なポスト、つまり、書記長、事務局長的なポストをもこなしている。そして、この張春橋論文が出た後は、むしろどちらかというと、張春橋論文を支持するような論調が中国の公式紙誌を覆ったような気がします。特にそれ

は、生産促進を促す運動へとつながって参りました。

こういふふうに見ると、張春橋、姚文元という二つの論文が、プロレタリア独裁理論学習運動という一つのキャンペーンの中で出てきている。それには、ある意味での対照性があるのではないかという仮説を導入して考えることもできるわけで、これは、その後の政治的転換を示唆するものであったような気がします。

ところが、やがて六月になると、事態はもっと進み、先ほどの「安定団結」というスローガンが表面に出てくる。

この「安定団結」を最も象徴的に示す論文は、『紅旗』第六号の岳海論文「理論を学習し安定団結を促進しよう」であったと思う。しかも、この「安定団結」を呼びかけた論文は、単に文革以後の状況の中で叫ばれた「生産を促し革命をつかもう」というスローガンよりは、もっと具体的に生産促進に触れて、農業、工業、国防、科学技術等々の近代化を進めなければいけない。つまり、現在の中国が、経済的な近代化を遂げること、つまり、国防あるいは科学技術を含めた富国強兵路線を強く主張しているわけです。ある意味では、全国人民代表大会での周恩来政治報告にもつながるような、一つの潮流を見ることもできるのではないかと思います。

ところが、七月に入ると、この「安定団結」のトーンにかなりの変化が出てきた。つまり、これに反発するような州間の汽車がストップして鉄道が混乱している。あるいは、香港の『ファー・イースタン・エコノミック・レビュー』などは、王洪文が北京からきてなだめようとしたが、結局うまくいかず軍が出動したというようなことを伝えていた。以後三カ月間、外人の立入りが禁止されていたということも言われています。しかも、華北からやってきた特別の公安部隊が警備に当たっているという情報もあったわけです。

これらの点は、もちろん確認されなかったわけですが、同じような混乱が単に杭州のみならず、南京でも起こっているらしいという報道もありました。南京軍区の政治委員である杜平が摘発されて、「杜平の五大罪状」という壁新聞が出て、林彪集団の残党としての杜平を批判する動き、これは江蘇省の革命委员会主任である彭冲との対立でもあったようです。こういうところでもかなり衝突が激しいというとも言われたわけです。

そういう状況の中で、七月一日には党の創立記念日を迎えたわけですが、特に何らの慶祝行事はありませんでした。七月の初旬から中旬になって、党の省委員会、あるいは省の革命委員会、あるいは軍の責任者が、杭州の第一棉織印染工場や絲綢印染工場などへ労働参加あるいは調査研究という名目で、次々に入っていくという情報がありました。七月二十一日には、傍受された浙江放送によると、

論文が出てきたわけですが。七月二十五日付『人民日報』の「路線が企業運営を決定する」などはその代表的なものであったのではないかと。

こうして、非常にあいまいで不透明な輪郭であった中国の政治状況の中にも、やはり複雑な動きが混在してきていたわけですが、ある意味では、十全大会以来の潮流と反潮流の角逐が、依然として繰り返されていると見ることもできるような気がします。

杭州事件の経過

そこに表面化したのが杭州事件です。そこで次に杭州事件とは何かという問題に触れてみたいと思う。この問題は、すでに日本の新聞でも伝えられていて、その概況は明らかですが、ここではまずクロノジカルに杭州事件の経過を見てみたいと思う。

杭州がどうもいろいろ問題があるのではないかと伝えられたのはかなり早い時期からでして、中国内部からではございませぬが、台湾、香港その他では、昨年十月あたりから、杭州ではすでに保守派と急進派の対立がある、あるいは武闘があるということが言われていた。今年の四月、五月には、外人あるいは華僑の立入りが禁止になったということも言われたわけです。こういう状況の中で、たとえば、五月にはすでに杭州で大規模な武闘があり、上海—杭

六千名の軍が工場の生産促進のために入っていったということが言われている。しかも、それは浙江省の党委員会の要請であった。また、七月には杭州のギアボックスの工場が同じような状況になり、そこに大量の軍が動員された。モスクワ筋の情報によると、現地の軍隊は労働者の側について軍の介入の側に乗じなかったため、党中央は、隣接諸地域から軍を導入したんだということです、『ニューヨーク・タイムズ』なども、武漢の軍が動いたという報道をしているわけです。結果的には、浙江省の軍区の司令員と第一政治委員、それから市の党委員会第一書記、第二書記が解任されたのではないかと等々のことが言われたわけです。これは、細部にわたっては確認されなかったけれども、後にお話するように、やがてその概要は、ほぼこのとおり北京によって公式に確認されるわけです。

七月中、下旬になると、南京、杭州のみならず、上海の工業地区でも同じような混乱があったと壁新聞が報じた。たとえば、上海の場合には、王洪文に対する批判が強かった。「王洪文は上海を足場に利用して出世したけれども、上海のことを忘れてしまった。今になって、上海の労働者に向かってブルジョア風を吹かしている」と批判する王洪文は「恩知らずだ」というような壁新聞があった。これは台湾情報ですが、そのようなことも言われたわけです。同じように、上海の壁新聞の中には、王洪文が二カ月前に、杭州

で労働者の中に入っていくって情勢を調整しようとしたが、それが失敗したということも言われておるわけで、このことは後の状況から見て、ほぼ事実ではなかったかと思うわけです。

特に上海綿紡績十七工場の壁新聞によると、王洪文の出世の内幕が暴露されたとも言われる。王洪文は、毛沢東の姪の王海容とうまくやって出世したんだとか、毛沢東の側近になった由来をいろいろ批判して、現在、プロレタリア独裁理論学習が盛んになっている中で、このような汚い関係〃を放置しておいてもよいのであろうかといった批判もあったそうですが、もとよりこの辺の真偽のほどはわかりません。しかしながら、王洪文を〃陰謀家〃であるとか〃両面家〃あるいは典型的な〃労働ゴロ〃であるというような、非常にどぎつい言葉遣いの壁新聞があったらしい。

しかも、王洪文は、今は雲の上の人になり上がって官僚風を吹かしているという批判があったことは、中国のこういう種類の批判が、かなり誇大な批判になりがちだとして、あながち否定できないような気がする。

そうこうしているうちに、七月十七日の『人民日報』は、「大風大浪もまた恐るべからず。人類社会は大風大浪の中から発展してきたものだ」という毛沢東語録を一面トップに掲載するわけで、香港で〃中国情勢、風雲急を告ぐ〃というような小冊子が出たのはこの時期です。

中央軍事委員会副主席〃という形で報道してあるわけですね。ところが、翌八月二日付の新華社新聞稿によると、八月一日発行の新華社新聞稿を廃棄する。そして、新たな記事を印刷し直すということが出ているわけでして、これは、後にもいろいろな問題を投げかけるころです。王洪文が批判されたのではないかという情報があったときに、こういう事件が起こった。私の手許の配信コピーは新華社香港分社の出したものです。新華社でこういう取消しが行われたということに注目していいわけです。

七月三十日の建軍節前夜の杭州放送によると、「反革命修正主義、ブルジョア派閥主義の影響、および一握りの階級の敵の妨害により、生産を増大できなくなった」というUPI通信の記事を確認できるような状況がある。このため軍隊が一万人以上動員された。しかも、杭州市にあった浙江省の軍区司令官はすでに更迭され、杭州市委員会第一書記、第二書記は罷免されたという事実が明らかになるわけです。

こういう状況の中で、八月一日の建軍節には何らの社説も出なかった。出たのは『紅旗』八号の何史署名論文でして、その内容は後で紹介しますが、軍の中にもかなり問題があることを示唆している。やがて『ニューズ・ウィーク』などは、「たんに人民解放軍が出動したのみならず、空軍まで出動した」というようなことを報じ始める。こう

こういう状況の中で、杭州の事態は進んできたわけですが、七月二十五日になると、傍受された浙江放送が伝えておるように、四千五百名の軍隊が、今度は杭州汽車発動機工場、つまり、自動車エンジン工場へ出動したということが言われているわけです。

七月下旬になると、UPI通信は「物質的刺激を求め労働者のストライキ」という形で、杭州事件の輪郭を外側から描いている。しかも「杭州の絹染物工場、印刷工場、ギアボックスの工場等々はブルジョア派閥主義、あるいは一握りの階級の敵による妨害のために生産がストップした。そして、特に七月十九日からは六千人の軍隊が派遣された」と報じた。これは、先ほど私が紹介したニュースと一致するわけです。

そうこうしている中で迎えたのが八月一日の建軍節でした。この建軍節ではどういうことがあったかと言うと、皆さんすでにご承知のように、多くの軍人が復権した。その中で最も象徴的なのは、かつての人民解放軍総参謀長であり、例の林彪戦略との関連でもよく知られた羅瑞卿の復活です。

また同時に、建軍節のことを伝えた八月一日の新華社通信は、王洪文の肩書についてミステリアスな報道をした。日本の新聞は報道していなかったと思うが、私のところに新華社通信の配信コピーがあるが、王洪文の肩書を〃党中

いう状況の中で注目されたのが、七月中旬から八月初旬まで、北京の各大使館に例の鄧小平批判の内部告発の文書が回ったということとして、これは日本の新聞にも外電として出ていたが、日本の大使館にはこなかったようですね。きたのは、確かイギリスとインド、それにアイルランドでしたか、フィンランドかだったと思うが、内部告発の文書があったというので注目された。これは、どうもかつて紅衛兵として勇ましかった北京航空学院の連中がやったことではないか。やり方としては非常に拙いやり方だったような気がします。ともかく、そういう何か流動的な状況が起こっていたことは否定できない。

やがて八月十三日になると、黒竜江省の放送が「派閥抗争による生産の大幅な阻害、ブルジョア派閥主義が革命と生産を大きく阻害している」といったニュースを報道するわけです。同じころタス通信は「雲南、四川でも農民が暴動を起こした」というようなことを言っています。

今までは香港なんかで傍受された地方放送などによった情報が主だったわけですが、いよいよ八月十四日以降になると、新華社がまず最初に杭州のギアボックス工場の事件を報道して、「革命をつかみ、生産を促す方針を破壊する誤った意見がギアボックス工場の中にあつた。少数の人間が党の指導権を弱め、これから逸脱する行為があつた」ということを認める。

やがて八月二十三日になると、「新華社杭州発」が、浙江省の軍区の指導機関、杭州駐留の所屬部隊の戦闘員が工場へ介入したことを公式に認めるわけでして、今までの西側情報、単なるスペキュレーションやデマではなかったことが明らかにされるわけだ。

やがて最後のには、九月十一日の『人民日報』が一面トップで、杭州への軍の介入を報道する。

こうして杭州事件の概要がほぼ明らかになったと思う。ただし杭州事件について、八月下旬から九月初旬の『人民日報』、『新華社』が、こういう形で事実を報道したということは、ある意味ではこの事件はすでに処理され收拾されたということを示唆しているように思われる。

杭州事件の意味

さて、そういう杭州事件であったのですが、その後の経過を見る前に、やはり、簡単に杭州事件というものの意味づけをしてみたいと思う。

これにはいろいろの見方がある、たとえば、これは文革派と、軍あるいは党の実権派との対立だという見方、あるいは、文革派がプロ独裁学習運動の下でブルジョア風を抑えるために、上から労働者を抑えるものである。それは、ある意味で文革派による労働者の搾取であり、それに対する労働者の反発である。王洪文への反発も、これと軌

を一にしているという見方、あるいはそのほかには、文革派がむしろ労働者をたきつけて、こういう不利な状況に陥った文革派が、事態の好転を図ろうとしたものだ等々の見方があるかと思う。あるいはまた、ここ数年来抑えられていた地方軍幹部、あるいは下放知識青年、知識人などの反発等が、この事件の背後にあったという見方もあります。

これらの見方に対し、必ずしもどれが正しいか言う必要はないと思うが、むしろ、私自身が杭州事件というものを見た場合に、この事件はかなり深刻な事件ではなかったかという気がするわけで、この点について少し述べてみたいと思う。

ご承知のように、中国には文化大革命以来の混乱、激動があり、さらに、それは林彪事件という、まさに路線闘争としては最も衝撃的な事件が起こった。それらの真実は、やがて、毛・周以後の時代にすべて歴史の中で相対化され明らかになることがあるかも知れない。しかしながらこれらの事件は、ある意味で権力闘争であり、路線闘争であったわけですが、杭州事件というものは、そういうものとや違った、まさに現在の中国の根本的な社会的矛盾の反映ではないかという気がします。それと同時に、現在の毛沢東思想なり、文化大革命以後のイデオロギー的なインドクトリネーション（大衆教化）に対する根強い抵抗を意味し

ているのかも知れない。とすると、事態の衝撃性はともかくとして、ある意味では、林彪事件などよりも重要な中国社会の根本矛盾を反映しているのではないか。つまり、一口に申し上げると、杭州事件は、毛沢東思想絶対化と申しますか、そういうタテマエ社会の中にある鋭い社会的な矛盾の反映であったということです。

それはなぜかと申すと、杭州事件の背景にあった賃金制度に対する不満とか、あるいは「ブルジョア風」というもの、こういったものは、結局、物質的刺激を求める現在の中国の一般民衆なり、一般労働者の方向性というものを示しているわけでして、私自身中国に行ってみて、品物が非常に多くなっていることに驚いたわけで、品物が多くなったということは、結局お金を出せば買える世の中になったことを意味するわけです。お金を出せば買える社会ということで、しかも中国の賃金は、十数年来凍結されたままである。労働者の平均賃金は確か六、七十元、少ないところは四十元、多いところで百五、六十元だと思えますが、デパートや市場にいけば、かなり品物は出回っている。中国の代表的なデパート北京百貨公司や東風市場の状況は、香港の国貨公司と完全に同じです。

従って、お金を出せば買える。買うならいいものを買いたい。しかも、これほどプロ独裁とか、ブルジョアの権利というようなことが言われておりながら、やはり、北

京の国際クラブを利用する特権幹部は、一般民衆の入れないところで食事ができるとか、そういう細かなことでも特権があるわけで、こういう状況を見ている民衆の中に、結局同じことではないかという、いわばタテマエ社会に対するリアリティーの追求みたいなものが出てきたのではないかという気がします。いくらマルクス・レーニン主義の理論とか毛沢東思想とかで何か言っても、結局だめであって、抜け道があるなら抜け道を求めようではないかという、ある意味では非常に中国的な発想が社会の底流にあるのかも知れない。

中国の将来を予測させる事件

もう一つは、党中央への不信、ともかく、現在毛沢東のカリスマ的な思想が貫徹しておりますが、やがてそれも消滅しようとする状況の中で、中央は中央であり、われわれはわれわれだといった底辺の民衆との間の意識のギャップ。それから、やはり中国社会は、今後外国からの刺激を受けていくわけで、このことがもたらすある種のリベリカッションというものも無視できないのではないか。上海とか杭州といった中国では最も開かれた、外国人が訪れる機会が多い場所です。こういう事件が起こっているということ、象徴的であるような気がします。

こういうような問題に加えて、毛沢東のリーダーシップ

に對する潜在的な不服従があるのかも知れません。結局、全国人民代表大會あり、批林批孔運動あり、プロ独裁運動あり、いろんなことが言われるけれども状況がわからない。このわからないさは、単に日本人、あるいは中国問題専門家から外から見てもわからないだけではなく、中国民衆にとってもわからないわけですし、こういう不明確な輪郭の中で、いわば実利的な、あるいは生活の向上、そこにだけは実在があるわけですから、そういうものを求めようとする民衆の非常に広範な要求が、背景にあったのではないかと気がします。そのことが物質的刺戟の問題とか、賃金体系の不満となって爆発したのかも知れない。そうだとすると、一つのたとえで言えば、もしかすると、結局、中国だってソ連社会主義がたどったと同じような道をたどるかも知れない。あれほど毛沢東思想を強調し、プロ独裁を強調している社会でも、やがてこういつた問題、ある意味でこの社会主義も共通にたどるような問題に逢着しているのではないかと、このことを示唆する意味でも、今回の事件は重要であったような気がします。

そこで、いわばブルジョア風とか、小生産者意識とか言われていることを、中国ではどういうふうに定義しているかについて、ちょっと振り返ってみましょう。たとえば、広東省の茂名市のある生産大隊の理論小組が「小生産とは何か」という問題について定義した論文の中でこのように

旧軍人、旧幹部の復権

さて、その後の状況を見てみたいと思つていますが、その中で、先ほどもちょっと触れたように、旧幹部の復権がこのところ相次いでいる事実をどう見たらいいのか、特に軍人の復権が目立つわけですし、文革時に失脚した軍幹部のうち、八〇%以上はすでに復活していると言われていませぬ。しかも、地位が高いほど復活の度合いが高い。最近では賀龍などが―彼は死んでしまっただけでも―再評価されつつあるといった問題。それから、先ほどちょっとご紹介した何史という人の『紅旗』第八号の「毛主席のプロレタリアート建軍路線に沿って前進しよう」という論文には、いわゆる「三支兩軍制度」の再評価が出てくる。「三支兩軍」といっても、中国研究者以外の方にはなじみ薄い言葉かも知れませんが、あの文革の当時、農業支援・工業支援・左派支援、軍事管制・軍政訓練―つまり、三つのサポートと二つの軍事管理の問題に触れて、私は、林彪が強調したスローガンだと思つているんですが、この何史論文によると、林彪は「三支兩軍」を歪曲したんだといった批判をしながら、「三支兩軍」に再び触れている。

こういうふうになると、いったい文革とは何かといういつもの問題に逢着するわけですが、ともかく文革当時の軍事路線で、しかも林彪が失脚したということで、逆に当

言っています。「小生産とは、これは憲法にも保証されているように許されるものであって、自留地、単独経営の経済、あるいは家庭副業というようなものを言う。しかしながら、一部の富裕の農民は、自留地を耕し、家庭副業を行うときに、集団経済を弱め資本主義を發展させずにはおかない。林彪のたぐいが登場すると、さまざまなルートを通じて資本主義を生み出す土壌と条件を作り、それを拡大し、小生産者から転化して、一部の富裕な農民が他人の剰余労働を無償で占用する道に生み至り、その結果、少数の者が新しいブルジョア階級になり代わり、圧倒的多数の人々が資本主義の搾取を受けるようになる」―つまり、プロ独裁の強化が強調されている中で、中国社会主義にとって残さざるを得ない小生産というものを認めていることがもたらす本来的な矛盾、そして、そのことが他人の労働をかせめ取っていくといったように、お金を出せば物が買えるわけだから、少しでも他人の家庭副業を自らのものに交換したり、自留地を一生懸命やって少しでもお金を稼ごうとする。そういう風潮が、中国社会の中にある幹部の特権化の問題とともに、下からの要求、もつとはっきりいえば労働者階級の要求となって出てきたものではないかという気がするわけです。こういう状況を考えてみると、やはり、杭州事件というものがもっていた意味はかなり重要かつ深刻なものではなかったかという気がします。

時の軍幹部が復活する。この「三支兩軍」というスローガンの復活は、非常に象徴的な出来事ではないか。しかもこのことは、まさに杭州事件に象徴されるような、軍が再び生産活動の中に入っていくかなければいけないという状況とも無関係ではないような気がする。

杭州事件は、伝えられるところによると、現地の浙江省の軍区は動かなかった。そのために浙江省の軍区の司令は解任されるわけですが、とにかく軍が出てくるということになると、すぐ林彪事件を思い出す、あるいは林彪が鼓吹したような、一種のギャリソン・ステート「兵營国家」的な体制を思い出すわけですが、そういう中で、林彪はけしからん、林彪的なものになってはいけないと言いながら、軍の旧幹部の復活なり、かつての軍の論理が復活しているところに注目すべきものがあるような気がする。その後の報道によっても、この間、軍が出動したのは単に杭州のみならず、安徽省の合肥、内モンゴルのホフホト、南京等々でも軍が工場に出ている。また、九月十九日の上海の輸送を図ったということが言われているわけです。

こういう一連の潮流の中で、この間多くの軍人が復活した。めぼしい人をアトランダムに挙げてみると、まず、この五月楊成武。皆さんもご承知のように、六六年八月十八日、天安門前の紅衛兵出現以来、毛沢東が紅衛兵に接見す

るときに、いつもボディーガードのように出てきていた楊成武。彼は文革初期の総参謀長代理であって、やがて譚震林らの二月逆流の一環として失脚しますが、この楊成武が筆頭副参謀長として五月十一日に復権している。

五月二十日には伍修権。かつて日本軍の前に白馬に乗って現れたという伍修権ですね。一九五〇年ですか、国連の中国代表として国連の場に登場したことがあるんですが、その後は外交部の副部长、党中央国際連絡部副部长等々をやっていた伍修権が、副総参謀長として復権しています。言うまでもなく彼は、文革初期に彭真の一味として失脚しているわけです。

それから、新聞でも注目された羅瑞卿の復活。羅瑞卿は、この十月一日の国慶節には、軍関係の責任者という形で明示されて復活している。彼は例の国際統一戦線の形成を唱えた戦略論で、単に林彪の人民戦争戦略と対比されるのみならず、文革当時は、いわゆる四家店の一人として激しく批判されたわけです。

同じく国慶節には譚政・元総政治部主任が、彼も軍関係の責任者として復活している。譚政も非常になつかしい名前前で、一九五八年の大躍進運動のころの軍首脳ですが、こういう人たちが復活している。

なつかしいといえば、かつて郭沫若が自己批判した文革初期に、その場を与えた石西民。それから、われわれ中国

長というふうに確認されているといった一連の地位の変化が目立つわけです。

こういう変化の中で、いわば人的な復活と並んで、この間中国には、ほかにもいくつかの注目すべき動きがありました。

一つは、今日のテーマと若干切り離れた方がいいのかも知れませんが、中国の外交政策における微妙な変化です。すなわち、ある意味での国家外交から革命外交への再転換と思われる兆候が一部にあることです。中国の東南アジア現地共産主義勢力に対するバーバルなサポート、声援の再開は、必ずしも中国の外交政策の転換だけではなくて、ハノイの影響力の拡大に対する中国の競合という色彩が強いと思います。それにもかかわらず、例の五月二十日に行われた、天津市各部門幹部への喬冠華外交部長の世界情勢に関する演説、これなどは、いろいろな信憑性をめぐっても議論がありますが、これは真実だと思っただけです。その中にも非常にラジカルな外交方針が出ていくわけですから、ご承知のように、彼によると、ラザクヤリー・クアンユー、スハルト、マルコス、それにカダフィをも含む中東のリーダーたちは、いずれもブルジョア代表であって、いずれは革命大衆によって葬られるという立場から、非常に強い姿勢を示している。

なお、喬冠華は、一般に周恩来の部下として周恩来路線

研究をする者にとっては忘れることのできない薛暮橋、経済統計学者ですね。それから、確か中国官僚、資本論などで有名な許瀚新ですね。それに中国共産主義青年同盟第一書記だった胡耀邦。こういうふうになってくると、劉長勝、劉寧一といった労働界のなつかしいところまで思い出されざるを得ない状況があるわけです。

内政・外交上の変化

こういう中で旧幹部が復活し、また最後にお話しますが、鄧小平などは、こういう復活旧幹部の最も大きな象徴ですが、次々に重要なポストを掌握しています。鄧小平は、今日中国において党・軍・政を握っているわけですが、中国の政治過程において、党・軍・政を一挙に握った指導者は恐らく鄧小平が初めてではないか。毛沢東といえども、五九年以降は政治を握ることはできなかった。党でさえも少数派に転落したことがあったわけです。劉少奇は、党では実権派として多数派を形成したが、軍隊に力をもっていたとは思われない。周恩来も同じように、國務院総理としての活躍にもかかわらず、党あるいは軍とともに、このような形で掌握したとはいえないわけですが、鄧小平は何となく代理のような形で出てきながら現在ご承知のように党副主席。それから、筆頭副総理。さらに、まだ報道としては明示されていませんが、人民解放軍の総参謀

の継承者だという見方があるが、私は決してそうは見えないわけで、確かに五〇年代、彼は周恩来の片腕として働いたが、彼のキャリア、それから最近の演説等を見ると、むしろ彼は、きわめて強固な原則主義者ではないかという気がします。そのことは、ある意味では過般の宮沢・喬冠華会談での中国の立場にも反映されているような気がするわけです。こういった一連の変化が対外的にあった。

農業をめぐる諸問題

もう一つ、対内的に大きな問題は、農業問題をめぐっていくつかの重要な動きです。ソ連側は自らの農業不振、食糧不足をも顧みず、中国では最近、農業不振で、四川省や雲南省で一連の農民暴動があったと盛んに言っており、そこまでは確認できないにせよ、中国の農業をめぐって、いくつもの問題が起きているのではないかと、いうことが考えられる。七月初めには、河北省の石家荘で「中共中央農業專業耕作者會議」があった。この會議の全容は明らかになっていませんが、台湾筋の伝えるところによると、江青夫人がこの代表に手紙を送って「現在の中国農業が当面する困難の中で、革命よりも生産を重視する、すなわち食を以て先となす一部の分子のやり方はけしからん」というようなことを強調しているそうです。

それから、日本の新聞にも報じられたように、九月十五

かという気がします。

現代の宋江は誰か

特に注目すべきことは、いくつかの論文がこの現代の宋江を批判し、「水滸伝」に対する従来の評価を分類して、「水滸伝」を評価するもの、否定するもの、矛盾した人物だと描くものといったように分けているわけでありすが、たとえば、九月四日付『人民日報』の社説では、「現在も宋江投降主義を農民の限界性とみて、このように見るのが史的唯物論の観点だと称する者がいる」というふうに現在形で書いていることが注目される。これらの状況から、現代の宋江はだれかという非常に刺激的な、あるいはすぐれて政治的な課題が出てこざるを得ないのは、ある意味で当然であるような気がします。

最後に、その問題についての推測を若干申し述べてみたいと思う。一般に香港あたりでは、最近も現代の宋江はだれかという小冊子が出て、鄧小平を指すものが多い。確かに、一般的に考えると、さっき言ったように、鄧小平の躍進目覚ましく党・軍・政を握っている。しかも、彼は復活幹部であり、旧実権派である。そういうことからすれば対象は鄧小平だというふうに考えられやすいといえよう。香港だけではなくて、たとえば、ビクター・ゾルザなんかもそういう意見ですし、日本にもそれに類した意見の人は多い

長、それから軍の総政治部主任、これは十月九日に報道としては初めて明らかにした。そして副総理ということですが、張春橋にしても、鄧小平がフランスを訪問する一方で彼は北朝鮮を訪問したり、かなり自信をもってやっているわけです。かつての劉少奇の例からしても中国の首脳は外国訪問中に危機に陥ることがあるから、当面矢面に立っている首脳がこのように外国訪問するはずはないといえよう。鄧小平、張春橋こそ、当面の毛・周以後の後継布陣であり、この兩人にはかけがえがないのではないかという気がします。

一方、毛沢東は、マルコス夫人との会見、あるいはクリット・タイ首相との会見などでの老齢化という報道にもかかわらず、最近意外に元気だということが言われて、国慶節前後もシアヌークあるいはヒース、レ・ジュアン・ベトナム労働党第一書記、ユーゴのピエジッチ首相等々にも会っています。また、李先念が西園寺公一さんに、毛沢東の内臓はなんともないと言ったということもあってこのことは周首相の内臓が悪いことを示唆しているように思われます。やはり、毛沢東そのものの健在は、毛沢東体制に対する潜在的な批判があるにせよ、疑いがないのではないかと思う。

次に杭州事件の焦点になった王洪文ですが、確かに王洪文は先ほど申し上げましたように、杭州事件の処理ではど

と思う。竹内実氏、柴田穂氏もそのようです。だが問題は、現在の中国の「水滸伝」批判は、いろいろまわりくどいことを言っていますが、「水滸伝」批判を現代的な言葉に要訳すると、「対内的には階級的な投降を行い、対外的には民族的な投降を行った。そういう投降主義者を批判すべし」というふうに言うことができるわけですね。

鄧小平の場合を見ると、さっき言いましたように、このところ非常に活躍が目立っています。党・軍・政を握っているだけではなくて、たとえば、国慶節ではレセプションを主宰している。フランスを訪問している。それから、十月十二日の『サンデー・タイムズ』に、英国のヒース元首相の発言が出ていたが、鄧小平は非常に強力なリーダーシップを発揮しているそうですし、キッシンジャーが最近中国へ行って、鄧のリーダーシップについてはかなり強い心証を得てきているはずですよ。それから、ソ連側も、鄧小平のリーダーシップについてはかなりの確度ある情報をもっているようです。それから、先ほども言ったような「農業は大寨に学ぶ」全国会議でも報告している。これはどの活躍が、一方ではこれほど鋭い、しかも毛沢東のエンドースメントによるイデオロギー、キャンペーンに当面しているからできるものかどうか。そう単純に現代の宋江は鄧小平だとはいえないような気がする。

それから、先ほどの張春橋ですが、彼は全人代の秘書もうまくいかなかったようです。最近王洪文は、国慶節にも北京にいないで上海に行ったきりです。やはり、上海に問題があるということは言える。しかしながら、一応序列は保っているようです。ただ、先ほどの肩書の問題、それに、九月十五日以降に開かれた、例の大寨の農業会議にも欠席している等々の問題があるが、毛沢東の側近であるんだれもが肯定し得る。しかも、誰が見てもそう大したリーダーシップをもち得るとは思われない王洪文を批判するために、今日のような大がかりな「水滸伝」批判が必要だというふうに考えるのは非論理的ですよ。

それから、江青夫人ですが、彼女も、五月十八日にキプロスのマカリオス大統領と会ってから、この十月十九日のデンマーク首相との会見に至るまでかなり多く、アフリカなどの首相の場合が多いんですけども出ています。毛沢東とともに会っていますし、この三月には、例の北京の外交部で江青講話などを行っている。また、大寨の農業会議での演説もある。それに、一部には則天武后や何かを評価する論文も出てきて、この辺になると、江青も単純には矢面に立つとは言えない。

こういうことになると、やはり残る人物として周恩来に注目せざるを得ない。現代の宋江はだれかをあえて断定することはいたしません。中国には「水に落ちた犬は撃つべし」という、非常に冷酷な政治の論理があることはご承

アジア時報

昭和45年8月3日第3種郵便物認可

昭和51年1月1日発行

毎月1回1日発行

通巻第69号

1
1976

巻頭言——日本の潜在力 1976年・アジアの展望

- ①21世紀へのスタート台に立つ中国
- ②きびしい寒さのなか党大会迎えるソ連
- ③対話復活なるか—朝鮮半島
- ④統一から飛躍目ざす社会主義のインドシナ
- ⑤連帯強まるASEAN
- ⑥歴史的転換の時にあるインド亜大陸
- ⑦第三世界の力の介入で新局面迎えた中東

杭州事件から「水滸伝」批判へ

「水滸伝」考

クーデターの国・バングラデシュ(FEER誌特約)

この人 アブサダト・モハマド・サエム バングラデシュ大統領

話の広場——山本憲(梅崖)——東条英機とスカルノ——アジアの
中の日本——中国旅行と欧米——松本重治氏の「上
海時代」を読み——毛沢東の一冊の本
(香港通信)香港のなかの中ソ対立

観測船——経済協力を模索するASEAN——規制と依存

アジア関係日誌 1975年11月

中 嶋 嶺 雄

村 上 知 行

社団法人 アジア調査会

知の通りです。私は周恩来の病気が、果たして肉体的な病
気だけであろうかという疑問を捨て去ることはできません。
六月二十六日に米国から帰った学者と病院内で会って
いるわけですが、同じ三十日には、病院の外で外国の賓客
と会っているということは、非常に病気がシリアスだと言
えるかどうかという問題もありますし、それにもかかわら
ず、九月七日以来公式の場に出していない。国慶節にも、初
めてですが欠席した。去年は病院から駆けつけた。病状が
重いと言えばそれまでですが、九月九日のシアヌーク発
言、そして、同じ日に鄧小平が語った周恩来に関する発言
等々を見ても、従来の中国で、首脳の病氣、たとえば陳毅
の病氣が考えられますが、なぜ周囲の者が、周恩来は病氣
だ病氣だとあえて言うのか、もしも、周恩来が本当に重病
であれば、むしろ、それを隠すことがこれまでの例であ
り、また中国にとっては必要なことであって、今、毛沢東
のプレステージや毛・周以後の問題が注目されている折
に、周囲の人たちが周恩来は病氣です、病氣ですと言っ
完全に病人に仕立て上げていることは、病氣が事実である
にしても、何か異常なことではないかという気がします。
最近の中国では、一九二七年当時の魯迅の遺稿が発見され
たとして、「水に落ちた犬は撃つべし」つまり、政治には
慈悲は必要なしという論理を強調している。

そこで、周恩来の文革以来の問題、鄧小平との複雑な関

係、あるいは林彪事件と周恩来との関係等、毛沢東体制下
における非毛沢東化への遠大な周恩来戦略の挫折の問題に
触れなければいけないんですが、それをやり出すと、もう
一、二時間の報告が必要になりますし、この辺は、ある意
味ではスベキュレーションになるので、以上をもって私の
問題提起をおわらせていただきます。

(昭和五十年十月三十日のアジア調査会アジア研究委員会での
報告。文責||編集部)

